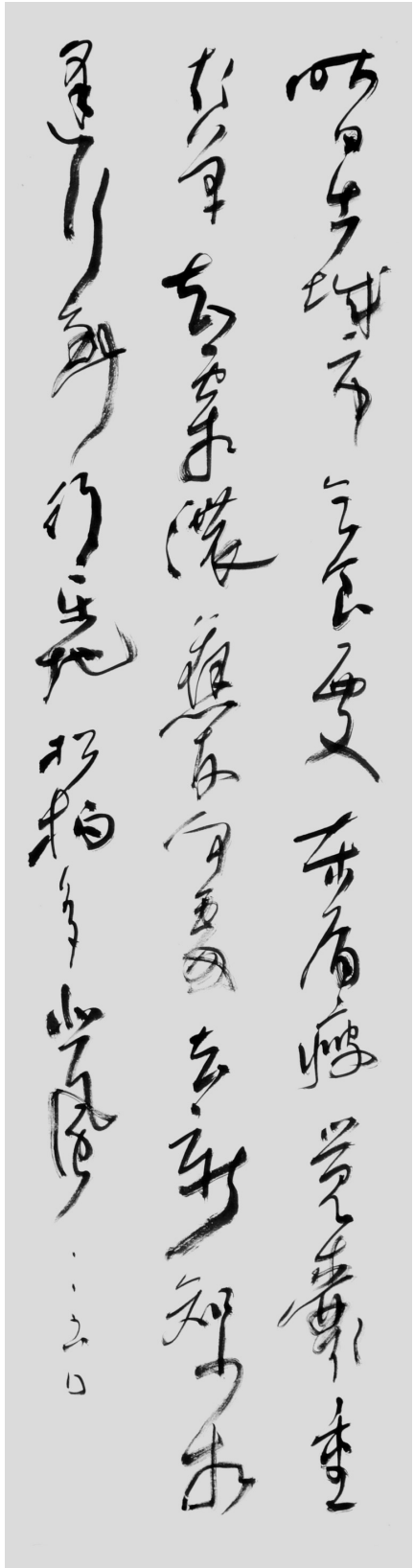


8月25日正午必着

明石春浦先生書



昨日出城市 乞食西又東 肩瘦覺囊重 衣單知霜濃  
 舊友何處去 新知少相逢 行到行樂地 松柏多悲風 (良寛)

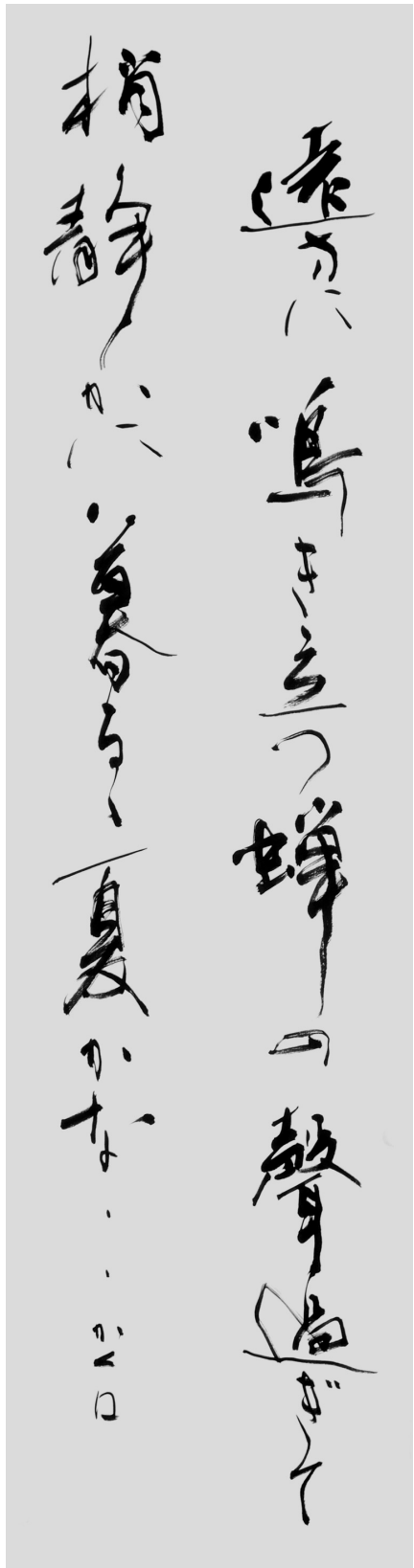
昨日城市に出で 食を乞ふ 西また東。肩は瘦せて 囊の重きを覚  
 え衣は単にして 霜の濃やかなるを知る。旧友 何れの処にか去る。  
 新知相逢ふこと少なり。行いて 行樂の地に到れば 松柏 悲風多し。

西 墨濤先生書



蕭閒自與世情疎 (文徵明) 俗世間から遠ざかった物静かな境地。

明石幸子書



遠方に鳴き立つ蝉の聲過ぎて梢静かに暮るる夏かな (正徹)

条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

清雲却<sub>二</sub>炎暉<sub>一</sub> (王 粲)

清雲炎暉を却<sub>く</sub>

涼しげな雲が夏の暑い日ざしを無くしてくれた。

炎暑惟<sub>レ</sub>茲<sub>レ</sub>夏<sub>二</sub>三旬<sub>一</sub>將<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>芳樹<sub>一</sub>垂<sub>二</sub>綠葉<sub>一</sub> 清雲自<sub>レ</sub>透<sub>レ</sub>迤 (阮 籍)

炎暑惟<sub>レ</sub>茲<sub>レ</sub>の夏<sub>二</sub>三旬<sub>一</sub>にして將<sub>レ</sub>に移<sub>レ</sub>らんと欲<sub>ス</sub>す  
芳樹は綠葉垂<sub>レ</sub>れ 清雲自<sub>レ</sub>ら透<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>たり

炎暑たるこの夏は、盛夏三十日で季節が移ろうとしている。かぐわしい樹は緑の葉を垂れ、すがすがしい雲はおのずと長くつらなっている。

別<sub>二</sub>鄭蟻<sub>一</sub> (郎士元)

鄭蟻に別<sub>レ</sub>る 郎士元

暮蟬不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>聽 落葉豈<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>聞

暮蟬 聴<sub>ク</sub>可<sub>ク</sub>からず 落葉 豈<sub>レ</sub>に聞<sub>ク</sub>に堪<sub>レ</sub>えんや

共是悲<sub>レ</sub>秋客 那知此路分

共<sub>ニ</sub>是<sub>レ</sub>れ 秋<sub>ニ</sub>を悲<sub>シ</sub>む客 那<sub>ニ</sub>ぞ知<sub>ラ</sub>らん 此<sub>ノ</sub>路<sub>ニ</sub>に分<sub>レ</sub>れんとは

荒城背<sub>二</sub>流水<sub>一</sub> 遠雁入<sub>二</sub>寒雲<sub>一</sub>

荒城 流<sub>ク</sub>水<sub>ニ</sub>に背<sub>キ</sub>き 遠雁 寒雲<sub>ニ</sub>に入<sub>ル</sub>

陶令門前菊 餘花可<sub>レ</sub>贈<sub>レ</sub>君

陶令 門前<sub>ノ</sub>菊 余<sub>ノ</sub>花 君<sub>ニ</sub>に贈<sub>ル</sub>可<sub>シ</sub>

野莓の赤実の珠は露をもちり心鮮けき光といはむ (島木 赤彦)

半紙部規定課題A

8月25日正午必着

官 欲  
去 徇  
微

※作品には必ず落款を入れてください。

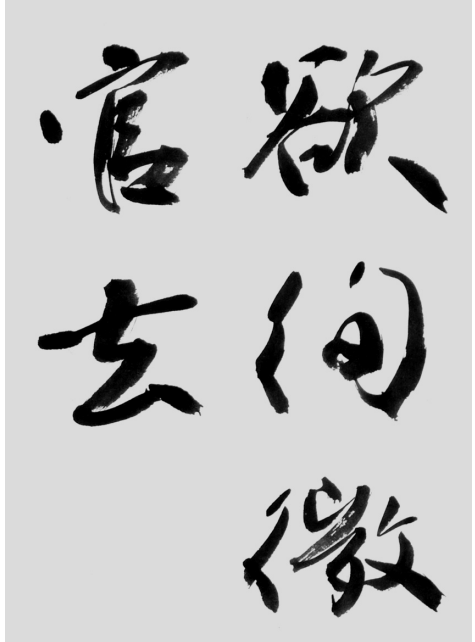
明石春浦先生書

※課題A(楷書)と課題B(四体の中より一書体選択)の二点を出品のこと。

半紙部規定課題B

8月25日正午必着

行書



隸書

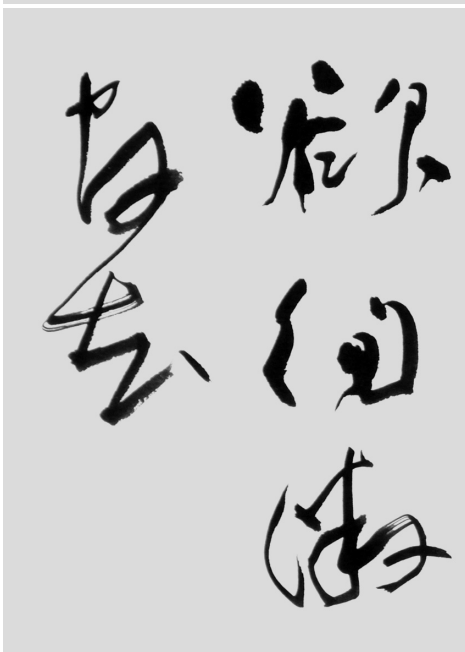


明石春浦先生書

草書



行草書



徳高き上人、本来の姓は竺といひ、菩薩のごときお方、もとの名は林といひ、  
 いったん春山の中に行っておしまひになれば、数知れぬ峰々の奥、お尋ねすることもできません  
 新たなる年に、春のかぐわしい草があたりいちめん茂り、一日じゅう、白い雲は深くとざしこめる  
 ささやかな官職にこの身を捧げて行こうとしておりますが、この凡俗の心を奇妙に思っておられることが、ここからでも  
 わかります

寄「靈一上人」

劉長卿

高僧本姓竺

開士舊名林

一去春山裏

千峯不可尋

新年芳草遍

終日白雲深

欲徇微官去

懸知訝此心

靈一上人に寄す

劉長卿

高僧 本姓は竺

開士 旧名は林

一たび春山の裏に去り

千峯 尋ね可からず

新年 芳草遍く

終日 白雲深し

微官に徇って去らんと欲す  
 懸かに知る 此の心を訝るを

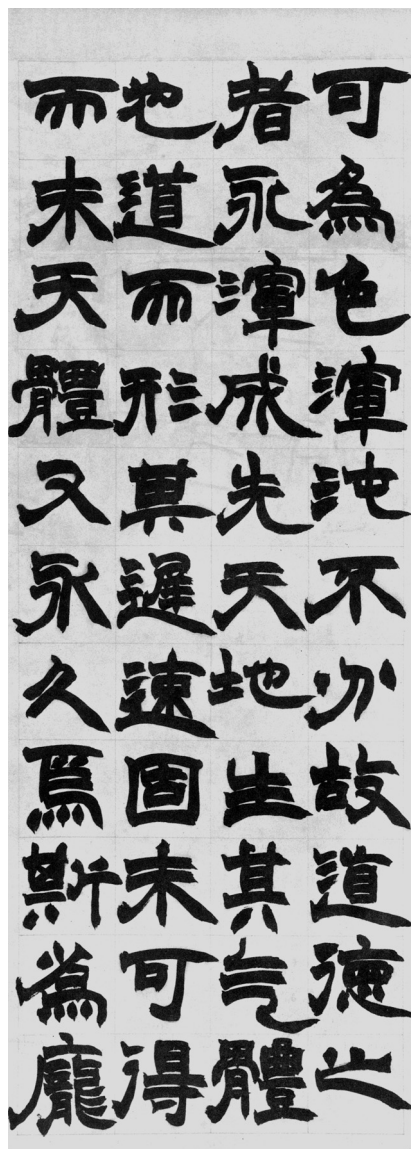
(出典)

朝日新聞社刊  
 「三休詩」下より

8月25日正午必着



故道德之者



西 墨濤先生臨書

清 趙之謙・開元占經

道光九年（一八二九）七月九日浙江省紹興に生まれ、光緒十年（一八八四）五十六歳で没した。はじめ字を益甫、冷君と号し、三十代になって字を搗叔、悲盞・无悶・愨察などと号した。

町の有力な商家の二男として生まれ、幼い頃から学問に目覚め、その才能を発揮していたが、家の没落、妻子の死という悲劇に見舞われた。科挙の推薦試験に合格していた彼は、三十五歳の時に進士の試験を受ける為に北京に上ったが、そこで出会った多くの人々や豊富な金石書画に触れ、すぐさまその道にのめり込んでいった。応試は二の次になり、五度の受験も結局及第することは出来なかった。彼の才能は書画篆刻に発揮されたが、書は晩年に熟境に到った。応試に必須であった顔法に始まり、北魏の刻石に触発され、さらに包世臣の書論における逆入平出の法に心酔し、独自の解釈を加えて彼の書法は完成していった。

開元占經は唐代の天文、占星術などに関する書物で、これは後漢の張衡が著わした靈憲の一節を趙之謙が隸書で四屏幅に書いたもの。彼が四十歳、逆入平出の技法に最も熱を入れていた頃の書と言われている。

（春濤）

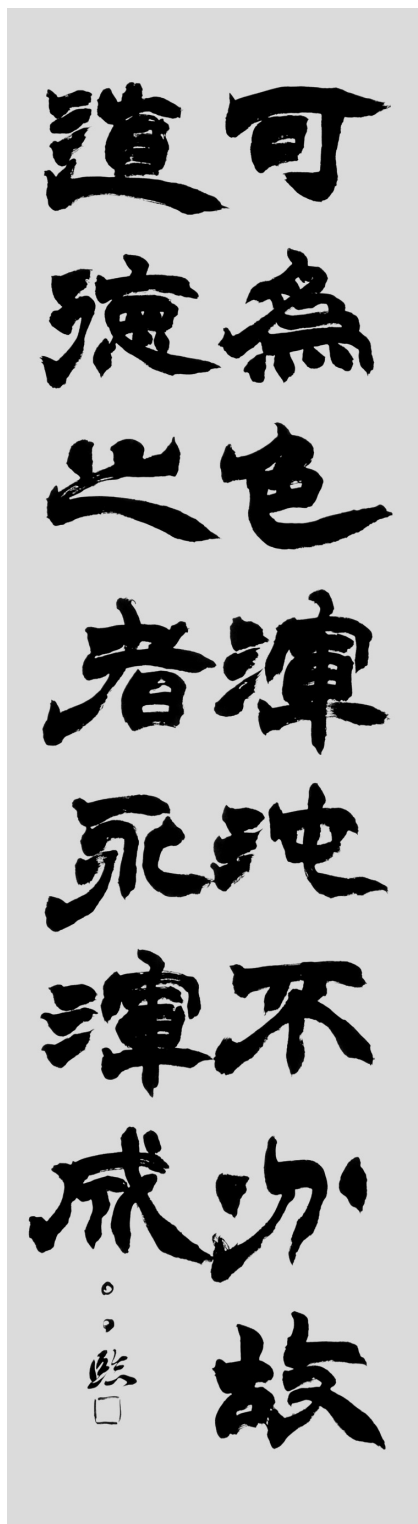
可為色、渾沌不分、故道德之者、永渾成、先天地生、其氣體也、道而形其遲速、固未可得、而未天體又永久焉、斯為龐



奮りんきよくをふるう鱗翼(宋書) 思う存分活躍するたとえ。

△做書参考▽

※この釈文での臨書部門の出品は出来ません。



可為色、渾沌不分、故道德之者、永渾成

8月25日正午必着

教育部毛筆



しお  
潮

かぜ  
風

中学一年

雨宮春聲先生書



らい  
雷

めい  
鳴

中学二三年

菅井松雲先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。





かい  
海

がん  
岸

小学五年

榎戸春龍先生書



きょう  
競

えい  
泳

小学六年

横川春川先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



8月25日正午必着



きん  
金

ぎょ  
魚

小学三年

藤田幸春先生書



りゅう  
流

せい  
星

小学四年

細谷春誠先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



明石幸子書

う

ず

小学一年・幼年



明石幸子書

はな

び

小学二年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

夏休みに親るいの  
家へとまりに行く

小学五年

夏休みの生活を絵に  
かいて記録します

小学六年

姉の作ったお菓子  
を試食してみます

中学

田舎のお盆には日本の  
風情が残っています

一般(級位)

炭がまを夜見に行けば垣の外に迫るがごとく蛙きこえ来(長塚節)

一般(段位)

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

ふ	さ
か	か
い	な
	が
う	お
み	よ
	ぐ

幼年

う	め
は	だ
	か
川	の
の	が
な	つ
か	こ

小学一年

七	山
い	と
ろ	山
の	を
に	む
じ	す
	ぶ

小学二年

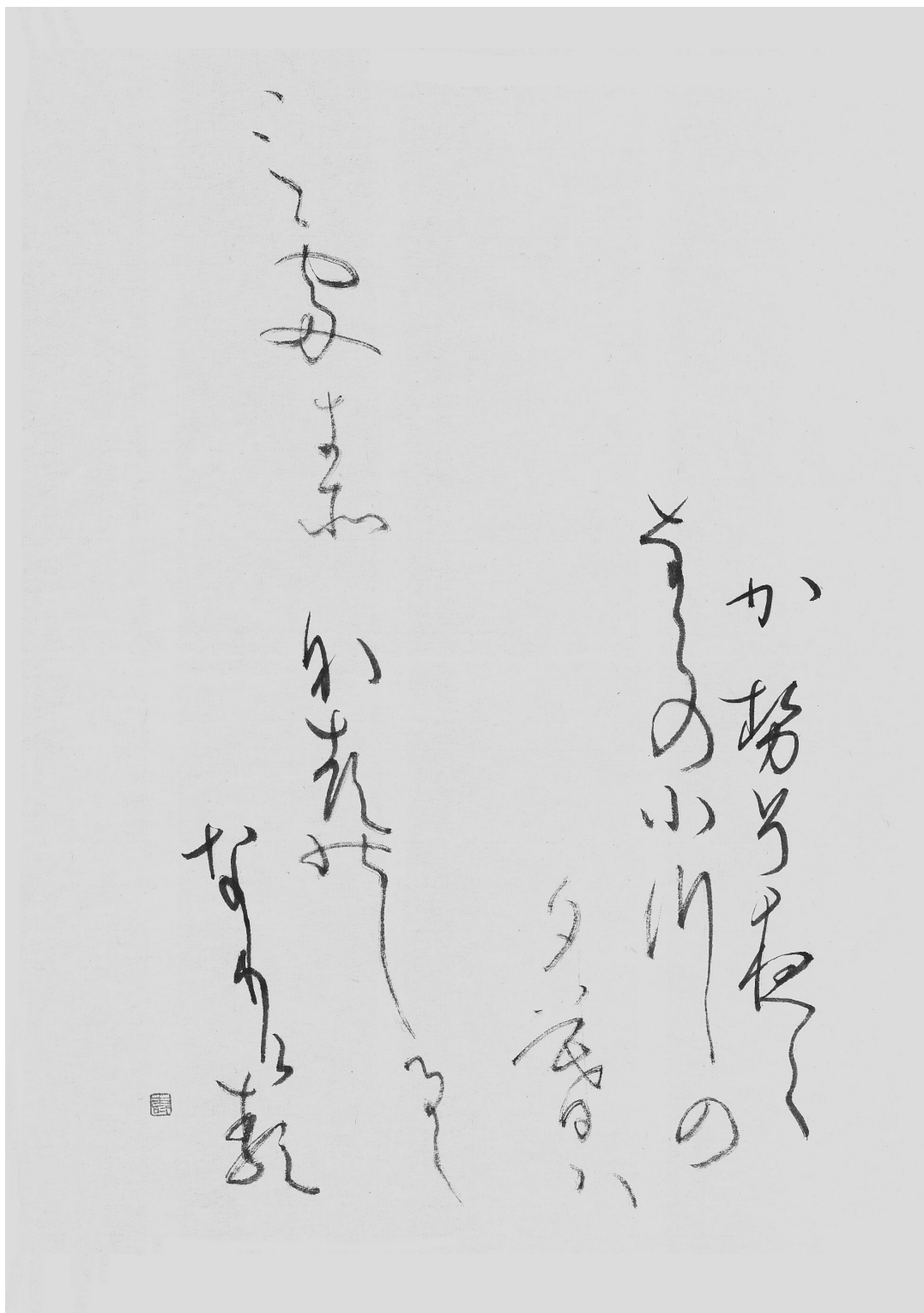
行	な
つ	つ
て	休
お	み
よ	
い	海
だ	へ

小学三年

入	こ
り	こ
き	こ
ん	か
止	ら
で	先
す	は
	立
	ち

小学四年

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。



岩本景楓先生書

かげそよく  
 勢曾夜 奈  
 ならの小川の  
 夕暮は  
 みそぎぞなつ  
 のしるしなりける  
 利介類  
 (藤原家隆)